

聖書に学ぶ

— 私たちの体は聖霊の神殿です（聖パウロ） —

門 脇 佳 吉

北海道は私の故郷でございまして、旭川で生まれました。ですから、ここに呼ばれて、皆さんとお会いできるのを、非常に嬉しく思います。故郷に帰って、故郷の人にお話できるというのは、また格別に感慨深いものがあります。このあいだ、東京でパウロについてお話ししましたときには、東京のイグナチオでしたから、200人くらい、たくさんの方が来てくださいました。でもやっぱり、今日の方が、なにか故郷の人に話すという感じがありまして、うれしゅうございます。

今日選びました題では、私たちのこの体、我々の体が、聖霊の神殿である、ということを経験するような話をしたいと思っています。頭で理解するのではなくて、「からだ」ですから、できれば体で体得していただきたいと思います。あとで、おそらく呼吸体操をして、「アバ、パパ」「アバ、父よ」という、みんなで叫ぶ祈りをしたいと思っています。

今、私たちの日本のキリスト教というのは、宣教師の努力によって、かなりの人が、40万とか50万くらいの方々がカトリックになっているんですけど、ヨーロッパでは、今はキリスト教はだんだん衰微してきているんですね。この春も2週間ほど霊的指導を頼まれてスペインに行ってまいりまして、その姿を見てまいりました。その一つの大きな原因は何か、ということをご皆さんに少し考えていただきたい。

それは、聖書のキリスト教と、今のヨーロッパのキリスト教とが違うということです。今のヨーロッパのキリスト教というのは、頭の宗教なんです。聖書のキリスト教は、体の宗教ぎょうなんです。体で行ずるということを大切にしている宗教なんです。

面白いことに、聖書が生まれたのはイスラエルでして、あれは小アジア。アジアに属するんです。あるヘブライの神学者は、我々はアジア人だ、だから日本人とよく似ているんだ、ということをおっしゃるんですね。たいへん面白いことだと思います。

そして、私はかつてイスラエルに半年ばかり滞在して勉強をしまして、イスラエルの神秘主義を勉強したんです。カバラという神秘主義があるんですけど、それを勉強しました。それで、びっくりしたことがあります。

三つの神秘主義があるわけです。カバラ、キリスト教ヨーロッパの神秘主義、それからもう一つは、禅があるわけです。禅というのは道元とかそういう人たち。私は禅の専門家でもありますので、禅と比べたんです。この三つの中で、どれとどれが似ていると思いますか。普通ですと、ユダヤ教の神秘主義と、ヨーロッパのキリスト教の神秘主義が似ていると思いますよね。どうしてかというところ、旧約聖書からキリスト教神秘主義が生まれてきたわけですから。ところがそうじゃないんです。もう少し丁寧に整理して話します。ユダヤ神秘思想のカバラ、東洋の神秘主義、西洋キリスト教神秘思想、それと今日お話しする『新約聖書』のパウロの聖霊論を比べて見ますと、驚いたことに、ユダヤ神秘思想とパウロの聖霊論と東洋の神秘主義、この三つがよく似ているのです。これらはどれも体を大切にするのは。西洋のキリスト教神秘主義は心を大切にするのは。

我々の、東洋の修行は全部、体ですね。特に呼吸法を大切にします。呼吸を深くすることによる行ぎょうです。それから、今日もお話しますが、パウロでは、人間というと、体を一番大切にします。頭や理性ではないです。

私は、皆さんよりもっともっとヨーロッパ化した人間なんです。といいますのは、たいへん長いこと神学と哲学とを、全部で30年くらい勉強しました。その結果、まったくヨーロッパ人と同じようになったんです。ヨーロッパの普通の人間よりもっとヨーロッパの人間になったわけです。

そして、日本に帰って来まして、それを教え始めたわけです。特に神学生たちに教えました。私の教えることが彼らにはどうも分からないんですね、理解できないんです。頭の悪いやつだな、と初めは思ったん

ですよ。ところがね、だんだん話してみたりすると、それから私が禅をやり始めてみると、分からないのも当然だと思いました。ヨーロッパのキリスト教は、頭で考えるキリスト教ですから。聖書のキリスト教とは違うんです。

今日お話ししますが、パウロは体で行ずることを最も大切にする人なんです。東洋もそうでしょう。坐禅も体で、呼吸と体で一所懸命やるわけですから。あるいはもっと易しいものでは、親鸞聖人が念仏を唱える。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、しかも、みんなで車座になって、大きな数珠を持って、そうして唱えるんですね。一体感があるんですよ。頭だけじゃなく、からだ全体で、一体感が出てくるわけです。一所懸命、もう無心に、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、みんなで唱えるわけです。パウロは、ちゃんとこれと同じようなことを教えているんですよ。

からだ（神殿）における聖霊の活き

「アバ、パパ」と叫ぶ

「アバ、パパ」と叫ぶ。まずはここから入りたいと思います。

これはちゃんとしたパウロの教えですよ。叫ぶというのは、唱えるということです。叫ぶとか唱えるとか言うのは、頭で考えて「アバ、父よ」と祈るという、そんなことではないんです。からだ全体で、「アバー！」とみんなで唱える。

親鸞聖人が、みんなで南無阿弥陀仏を唱えるように、パウロの原始教会は、みんなで「アバ、パパ！」って叫んだんです。それは日本の言葉でいうと行なんです。からだ全体で祈るんですよ。頭で祈るんじゃないですね。

もちろん頭は使いますよ、御父がどれほど私達を愛しているか、キリストを送ってくださって、十字架まで従うようにされて……という話はあるんですけど、しかしそれはただ頭で理解するだけではないんです。最後は、「アバ、パパ」って叫ぶ。パウロは『ローマの信徒への手紙』の八章の15節で、「あなたがたは、人を、神の子とする霊を受けたのです。

この霊れいによってわたしたちは『アバ、パパ』と叫さけぶのです」と言っております。

聖霊がまず叫ぶんです。面白いですね。この祈りをもっとも深い祈りだと思えます。まず聖霊が叫ぶんです。私達の中で聖霊が叫ぶんですよ、叫んでいるんですよ、私達の中で。それで、私達はそれに基づいて、「アバ、パパ」と、一緒に、共同体として、祈るんです。

この「叫ぶ」ということは、聖霊に触発されて、そして聖霊と共に叫ぶんです。全身で、肚はらの底から、口先だけでなく、頭で考えてじゃなくて、もう人間全体でもって働く。

そうすると、聖霊は、私達が神の子であることを証しして、証明してくれる。はっきりと教えてくれる。間違いなく、あなた方は神の子ですよと、ちゃんと一人一人に教えてくれる。これはパウロの教えです、私の教えではありません。

ただ、一緒に叫ばなければなりません。頭で考えてもダメです。親鸞聖人も同じでしょう。南無阿弥陀仏しょうみょうという称名しょうみょうというものを唱える。もちろん信仰をもって唱える。そうすると証ししてくれて、そして悟るといふ。

つまり我々は神の子であることを悟るんです。神秘家なんです。我々は神秘家になれるんです。難しいことではないんです。何か、政治のように偉大なことをする、偉大な説教をする、そんな必要はないんです。みんなで叫ぶんです。例えば、パウロの『コリントの信徒への手紙 一』の六章の19節に「あなたがたの体は、神からだからかみにせいれいをやどらせた聖霊が宿しんでんっている神殿です」と書いてあります。

私はそのパウロの言葉を読んで、うわあ、すごいなあと思ったんです。ヨーロッパの人は、実際に読んで、頭で理解するんですけど、「アバ、パパ」と叫んだり、唱えたりということを誰も実行するということを考えないわけです。これがヨーロッパのキリスト教なんです。理解して、それで終わり。そうではなくて、やっぱり、「アバ、パパ」と叫んだり、唱えたりということを実行することが大事なんです。

書いてある通り実行したパウロの初代教会は、実行したから、素晴らしく栄えたんです。霊が息吹いたんです。聖霊に息吹かれたんです、初代教会は。ものすごい勢いでキリスト教はヨーロッパ世界に広がったん

です。現代のヨーロッパとの違いがわかりますか。

だから皆さんも、今日話を聞いてね、ただ良かったなあ、良い話を聞いたって思うんじゃないかって、実行していただきたいんです。あとからちゃんとその方法をみんなでやりますけれど、その前にちゃんとした話をしておきたいと思います。

聖書の人間観は、現代キリスト教の人間観（肉体と靈魂の二元論）と違う

聖書の人間観は、現代キリスト教、ヨーロッパ的なキリスト教の人間観と違うんです。現代のキリスト教、ヨーロッパ化されたキリスト教は、肉体と靈魂は二つに分かれていて、それが一つになっているという、二元論なんです。

ところが聖書は一元論なんです。体、っていうと、人間全体を表すんです。心、っていうと、人間全体を表すんです。面白い言葉ですよ。勿論それぞれ別の角度から人間全体を見るんです。

しかし、パウロにおいては、人間という言葉を使う時に一番よく、「体」（ソーマ）、という言葉を使うんです。どうしてかっていうと、我々は生きて行くために神様と関係し、人とも関係し、自然とも関係してくるでしょう。その、関係して生きるのは、体で生きるんです。

心、っていうとね、全体性は生まれてこないんです。心だけ、理性だけですと、全体性は生まれてこない。ヨーロッパの、私が勉強したキリスト教によると、「愛」というと、心の中にある愛なんです。ところがどうも、心と体は分かれていますから、心だけの愛では、体にはまだ、愛は満ちてこないわけですよ。しかしパウロは、体、っていうんです。体によって、もう既に愛を実行しているんです。そして、「あなた方の体は、あなた方の内に宿っている聖霊の神殿である」と。

これははっきりと、この「からだ」が聖霊の神殿なんです。だから、パウロは『コリントの信徒への手紙 一』の六章の20節で「あなたがたは、自分の体で神の栄光を現わしなさい」と言うのです。精神じぶんだけで神を讚美しなさい、とは言っていません。この「からだ」で神を讚美しなさいと言っているのです。

聖書はどうして体を重視するか。体で神様と関係するんです。交わるんです。他者と交わるんです。自然と交わるんです。呼吸で交わるんです。聖書のいろんな処にそういうことが書かれているんですよ。

それから、キリストの体っていうのは教会なんです。パウロは『コロサイの信徒への手紙』の一章の24節で、「わたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています」と言っております。「教会」というと、キリストの体のことをいうんです。キリストの魂なんて言わないんです。ミサでも、「アバ、パパ」という叫びも、初代教会の苦難も、みんな体で行われた。

愛の行為は、大部分からだで行われるんです、皆さんの日常生活でも。だから神学者よりは、普通の信徒のほうがこれはすぐ理解すると思います。例えば夫婦愛、セクシュアルな関係はもちろんのこと、日常生活で、家族が生活するときには、体ごとですよ。お母さんが食事を作ってください、お父さんは仕事に出てお金を稼いでくれる、みんな体で、身を粉にしてやっているんです。子供を育てるとき、精神だけで育てられますか。子供を抱っこしたり、病人を看病したり、食事を与えたりすることが出来ますか。

それから、看護師それから名医、今のお医者さんは、体を見ないんです。こういう医者をお私は本当の医者とは思いません。しかし名医は、必ず体を見ます。面白いですよ。それは一つの、名医であるか名医でないかの区別です。だって、機械ではないんです、人間の体は。今のお医者さんはみんな機械で検査をして、聴診器で体を見ないんです。しかし名医は、人間と、部屋に入ってきたその人の様子とを、ちゃんと見てるんですよ。いろんな私の経験があるんですが、皆さんにも自分で経験していただきたいと思います。

漢方医なんてそうですね。脈診をしますね。私の知り合いに面白い漢方医がいて、このあいだうつ病を手当てで治すということを言っていました。からだ全体で、こう手を当てて、力を与えて、それでうつ病が治ってくると。

それからもちろん、イエズス会を創立したイグナチオ・ロヨラが霊操というときの、霊操の「操」というのは体操の「操」なんですね。イグ

ナチオは『靈操』の実体験を通じて、同志や後輩がイグナチオと似た神体験をするように指導したのです。

それから、靈というのは、みんな靈魂と一緒だと思っている。とんでもない話です。靈というのは風なんです、呼吸なんです、聖靈なんです。ヘブライ語では、ルーアッハと言います。風であって、そして呼吸であって、聖靈。その三つは深く関係しているんです。

例えばね、日本の詩歌の伝統の中に芭蕉という人がいます。今日は七夕ですので、芭蕉の七夕の有名な歌をちょっと披露したいと思います。芭蕉は、旅に出るのは、「片雲の風に誘われて」と、なにか風という比喩で、靈的なものによって促されて旅に出る、旅に出なければ本当に俳句を作ることはできない、ちゃんとそう言っています。

七夕の歌で一番有名な歌の一つに「荒海や佐渡によこたふ天河」という芭蕉の俳句があります。

天の川はちょうど七夕の日の今日の主題です。あそこで天の恋が行われたんですね。まず最初に、地上だけではなくて、天がずうっと開けているんです。向こうの方に佐渡島が見える、その間に、もの凄い荒波があるんですよ。

日本海の荒波をごらんになったことがありますか。ものすごいものですよ、とくに冬になるとね。ものすごいビジョンでしょう。見える海、そして世界。その世界は海が大部分です。陸は三分の一くらいですよ。

そして、銀河の序という俳文がその俳句のそばについているんですけど、そこに書いてあるのは、佐渡島というのは、金が出たと。金山があって、その金山で働いていた労働者は大部分が罪人ですね。そういう苦しみの中で金山が営まれた。そして流人がいた。日蓮をはじめ、能の大家の世阿弥も流された。その他たくさんの貴族達が流された、その島なんです。その歴史を踏まえて、人間の悲惨な歴史をその中にちゃんと詠みこんでいるんです。しかもそれが全部天の川によって、天の支配の中で行われている、と。素晴らしい俳句です。これはね、私は、靈がないとこういう見方はできないと思うんです。

聖靈はみなさん「アバ、父よ」と唱えてくるとね、だんだんそういう宇宙的なビジョンになるんです。どうしてかはまた後で説明します。これはすごいですよ。皆さん「アバ、父よ」って叫ぶ祈りを是非ずっと唱え

てほしい。一日中、私は一生懸命やっている。今さっきもこの話の前に30分間坐って参りまして、その時も「アバ、父よ」と唱えてきた。すごい力が生まれてくる。そしてそれは、風と呼吸と聖霊、とくに呼吸と聖霊が結びついている。これは非常に注目すべきことです。

坐禅の要諦、それから東洋の修行で一番大切なことは呼吸です。そうして深く霊と結びついて、呼吸を深くすることによって、霊を深く受けるんです。

それで、先ほどの「アバ、父よ」という、これは、このからだは聖霊の神殿である証拠です。「アバ、父よ」、「アバ、パパ」と唱えることによって、聖霊がまず唱えて、そして叫んで、そして我々がそれに応える。

仏教の言葉に感応道交という言葉があります。道元さんも使っています。参考書として挙げました、『『正法眼蔵』参究』（拙著、岩波書店、2008年）でも触れましたが、感かんというの、仏はたらの活はたらきを感じ取って、それが道の中で交まじわっている。しかもこの体で行われている、という意味です。

私たちの体の中で、「アバ、パパ」と叫んでいる神はたらの活はたらきがまずあって、それに応えて、感じ取って、我々もアバ、パパと唱える。叫ぶ。そうすると、それに応えて、聖霊は私達が神の子であるということを証明してくださって、私達は本当に確信をもって悟るんです。神様、この全知全能の神様が、私達に、我が子よ、と呼びかけてくれる。私達は神の子なんです。すごいことです。それがわかるんです。確信できるんです。間違いない、ということをはっきり聖霊が証明してくれる。

☆ ☆ ☆

それに基づきまして、今からちょっと「アバ、パパ」の叫びをやろうと思います。叫ぶために、肚はらで呼吸しないといけませんので、ちょっと呼吸体操をしようと思います。どうぞちょっとお立ちください。

呼吸体操はいろいろあるんですけど、今日は一つだけお教えます。この体操ができるためには、三つのことが必要です。

まず、体をやわらげる。皆さんは体が硬くなっちゃっている。柔らかくしなければいけません。それが第一。

第二点は、ながーく吐き出すんです。ながーく吐き出すんです。すると自然に空気がいっぱい入り込んできます。私たちは、普通の呼吸では、三分の一ぐらいしか吐き出していないんです。三分の一ぐらいしか呼吸していないんです。全部吐き出すと、いっぱい入ってくるんです。元気になるんですね。肉体的にも元気になるんです。もちろん神の息吹が……。

『創世記』の二章を御存知でしょう。神様は人間のかたちを塵で作られて、そして鼻に、神の命の息吹を与えられた。皆さんは、神の息吹を与えられているんですよ。聖書を頭で理解して、神がつくってくださったんだ、そんなんじゃないんです。現に、あなた方一人一人は、神の命の息吹を、瞬間瞬間、与えられているのです。それが私達の呼吸のもっとも大切な点です。呼吸を吸うときに、神の命を吸い込むんです。ですから、ものすごく柔らかくするわけです。そして肚はらにぐっとためて、それを大地に向かって吐き出すんです。全部吐き出す。だあーっと。

それでは立ってやりましょう。皆さん足を肩幅に開いて下さい。私の方を向いて、真っ直ぐ立って、手を横にします。で、体を柔らかくして下さい。

第三番目には、集中です。集中といっても、心を集中させるっていうことではないです。呼吸に集中するんです。体の、呼吸に集中する。ぐう、っといっぱい吸い込んだら、肚はらにぐっとためる、それをだんだんだんだん、下へとずっと視て行く、通して行くんです、体をね。大地に向かって、だあーっと吐き出す。

それを立ってやりましょうか。皆さん足を肩幅に開いて下さい。そうすると安定して、しっかりと大地に立てるでしょう？ 私の方を向いて、真っ直ぐ立って下さい。手を横にします。そして、体を柔らかくして下さい。

眼を半眼にします。まずは私がやっているのを見て下さい。ただ外側だけではなく、中も注意深く見て下さい。まず吐き出す時に、ずうーっと吐き出すんですけど、その時に、指を真っ直ぐ立てます、ずうーっと。足も、吸い込むときはちょっと柔らかくして下さい。吐き出すときにはぐうっとうき出して、大地をしっかりと踏まえて、そこから吐き出す。大地に向かって、足の平で。

ちょっとやってみましょう。ゆっくり全部吐き出して。いっぱい吸い込みましょう。肩の力も抜いて、それからゆっくりと吐き出します。指を立てます。ぐいっと、足を、膝を立てます。大地をしっかりと踏まえます。全部吐き出す。はい、それからゆっくりと体を柔らかくいっぱい吸い込みます。丹田にぐっと込めます。そして大地に向かって吐き出します。はい、もう一度しましょう。柔らかく、いっぱい吸い込んで。

今度は親指を握って丹田の上に置きます。吸い込むときにはちょっと柔らかく。一回吸い込んで、丹田にこめるときに指をぐっと握ります。そしてゆっくりと、大地に向かって吐き出します。

はいもう一回やわらげて、指も柔らかく、いっぱい吸い込んで、はい、ためて、ぐっと握ります。そして、ぐうっと大地に向かって吐き出します。

それでは、私が「アバ、パパ」と呼びます。私が一度見本を示しますので、次は三回みんなで「アバ、パパ」と呼びましょう。

いっぱい吸い込んで、^{はら}肚にぐっとためて、そして、ゆっくり「アバ、パパ」。

はい、いっぱい吸い込みましょう。ぐっと、とめましょう、はい、一緒に。「アバ、パパ」。いっぱいすいこんで、^{はら}肚でとめて、「アバ、パパ」。もう一度、いっぱい吸い込んで、^{はら}肚にためて、「アバ、パパ」。

はい、座ってください。

☆ ☆ ☆

これを何べんもやりたいんですけど、今日は講演ですので……。みなさん家に帰って、今ならった方法を何べんも繰り返してやってみてください。それからだんだんなれてくると、歩いているときに、いろんなところでやるできるようになります。そうすると、いつも聖霊が叫んでいる。私が叫ぶ、そうして聖霊が我々に神の子であるということを、だんだんに証してくれるわけです。これまで行くのが大変ですよ。

まず第一に、それをやっていると、喜びが湧いてきます。平和がやってきます。心が、からだ全体が平和になる。喜びと平和と希望、これが^{はたら}聖霊の活きの結果です。しかし、まだ証明ではありません。^{はたら}聖霊の活き

のしるし、徴候です。しかしそれを長い間、一年ぐらい実行していくと、必ず、神の子であるということを悟ることができます。絶対に間違いない、聖霊が教えてくれたんだと。すべてが聖霊の活きはたらによるものだということが証明されます。そういう体験は、誰でもできるんです。パウロの言葉ですからね。難しいことではないんです。実行するんです。やってみてください。もしもそれができれば皆さんは生き生きとしてきます。

そして、これから話をしていきますように、キリスト教の、本当に素晴らしい、キリストの活きはたらが見えてきます。そして私達はそれに生かされていることが見えてきます。そして、生き生きと生きて行くことができるようになります。これが、我々の体が聖霊の神殿である証拠です。そうして、行ないを通じて、もちろん、パウロは、愛に関する行いを非常に大切にします。

それから、後から見ますけれども、キリストと共に十字架を担っていくということ。これは初代教会の一番の特徴なんです。

迫害が起きました。そして、使徒たちは迫害が起こったときに喜んだんです。キリストと共に苦しむことができるようになった、と。これが本当のキリスト教の体験ですよ。

そして、それはもう、誰でもできることです。特に私のように、だんだんと年をとってきますと、老いゆえのいろんなものが出てまいります。特に私は今、足が駄目になってきました。いろんなところに故障が起こるわけですよ。しかし、「アバ、父よ」と唱えることによって、キリストと共にその十字架を担っていくんです。

聖イグナチオは、病気は神の恵みだ、と言っている。本当ですね。キリストと共に十字架にかかっていく、その恵みなんです。特に死の瞬間は、そういうふうに受けると、本当に恵みです。キリストの十字架の死に倣う瞬間です。それを何時もやっていけば、日常生活の小さなことで実行していれば、死の瞬間の時にできるわけです。やらないで観念だけでキリスト教を理解していたらだめですね。毎日毎日の生活の中で苦しみを担って行って、そうして死の瞬間のときに、キリストと共に、十字架にかかって死ぬ覚悟で。そうすればまっすぐ天国にいける。間違いありません。

聖霊は私達の体において^{はたら}活いている。

聖霊は私達の体において^{はたら}活いている、と。我々はまず感じません。まず、そんなことは誰も考えません。しかし聖霊が私たちの中で^{はたら}活いている事実があるんです。それはパウロが教えていますし、パウロだけじゃなくてヨハネも教えています。このことは聖書の中心的な考え方です。

パウロははっきりと、聖霊は私達の体の中において^{はたら}活いているということを行っています。特に『フィリピの信徒への手紙』には、パウロの非常に大切な教えがあると思います。

その中にこういう言葉があるんです。「あなたがたは最初の日から今日まで、福音にあずかっている。あなたがたの内^{うち}にあって、善き業を始められた方、父なる神が、キリスト・イエスの日、終末の日までに、その業を成し遂げてくださる」。これは『フィリピの信徒への手紙』の一章の5節から6節にかけての言葉です。

そして、『フィリピの信徒への手紙』の二章の13節に、「まさに神ご自身^{しん}（神に冠詞がついていませんので、ここでの神は、神、キリスト、そして聖霊を意味すると考えられますが、その神）が、あなたがたの内^{うち}にあって御意^{みこころ}にかなった事柄^{ことごと}を願うようにさせ、働くようにさせるように^{はたら}活かれている」とあります。たいへん面白い文章なんです。ちょっと日本語としてはこなれていない文章ですが。

神様は^{はたら}活くんです。私達の中で、^{はたら}活くんです。私はそのはたらきを「活き」というように書くんです。普通は「働き」と書きます。「働き」、これは見えるほうの「はたらき」、^{はたら}「活き」、これは見えないほうの「はたらき」なんです。神様の^{はたら}活きは見えないんです。しかしその結果がわかるんです。

そしてその^{はたら}活きが、あなた方において何をしているかっていうと、まず第一に、「御心^{みこころ}にかなうことを願うようにして」くださる。これは面白いですよ、みなさんの中で^{はたら}活いているんです。

たとえばこの講演にいらっしゃるという望みを起こしてくださった、これも神様が^{はたら}活いている証拠。聖霊において^{はたら}活いておられる。それから、いいことをしようという衝動^{はたら}が起こるでしょ、これは神様の^{はたら}活きなんです。

最近面白い方が私の周りに集まってきて、その中に、坊さんになって曹洞にいらっしゃる方がいるんですが、その方がね、カトリックの修道者になりたいという望みを起こしたんです。私に手紙を下されたんです。

それで、私は手紙を書いたんです。それはたいへん難しいことですよと。まず洗礼を受けなければならない。洗礼を受けるためには一年ぐらいかかります。その洗礼を受けてから、修道会に入るまでに三年間、ちゃんとしたキリスト教的な生活をしなければなりません。それから、修道生活で修練しなければなりません。本当に誓願を立てるまでに十数年かかる。イエズス会ですと12、3年かかる。そのことを書きました。そうしたら、それでもカトリックの修道者になりたいと言ってきた。これは、本当に神がその方に、よき願いを、思いを、起こさせた、そして実行しようとしてされている。

御心^{みこころ}にかなうことを願うようにさせて、そしてそれに基づいて働くようにさせる。願うだけじゃなくて、実行して働くんです。そのように神様は私達を助け、働いている。これはパウロの言葉です。皆さんの中にもそれは必ずあるんです。これが本当のキリスト教です。

ここで中心的な言葉は何でしょうか。それは「神様は活^{はたら}く」という言葉です。そして私達がそれに応えて、神様の活^{はたら}きが私たちによい思いを、望みを起こさせてくれるんです。感応道交^{かんのうどうこう}です。そしてそれをまた、それを実行させてくれるんです。ただ願いだけでなく、実行させてくれる。行い^いです。からだで行っていくんです。そして、それを完成してくれるんです。終わりの日まで完成してくれる。それは「道交」です。

善意の人において：異邦人でも心に書かれた律法に従って生きる人々（善意の人）を、神は救われる。

「異邦人でも心に書かれた律法に従って生きる人々、善意の人を、神は救われる」。これは、パウロの教えです。異邦人というのは、ユダヤ人でない人を異邦人という。今ではユダヤ人は少数派で、我々はみんな異邦人ですけれど。それから特に私たちには、キリスト信者になっていない方々が、たくさん周りにいます。しかし善意の人々が、たくさんいるんです。

今度の東日本大震災のときに、多くのことが行われました。それが報道される中で、外国の方はみんな驚いた。その一つは、キリスト教信者でないにも関わらず、キリスト教的な行動をなさって、人々のために働いた。自分の命を捨てても他の人の命を救った。消防隊員とか、いろいろな方々がその模範を示してくれた。それに驚いたんですよ、びっくりした。これこそ善意の人です。パウロが言うように。

これも聖霊の活はたらきです。霊による、その活はたらきだとパウロはちゃんと言っています。私は道元を勉強しました。道元という人は素晴らしい人です。それから親鸞も勉強おもりしました、日蓮も勉強おもりしました。

わたしの禅の導師で、大森曹玄老師という方も本当に立派な方です。間違ったことをすると、もう、すぐ、本当に怒鳴られた。それは一生涯忘れられない。例えばね、講話っていうのがありまして。一時間くらい坐禅をしてから、講話がある。その前に、老師は二階のお手洗いにいった。その二階の電気がついていたらしんですね。そして帰ってきて、講話を始める前に怒鳴られた。「お前達、坐禅している。電気というのは仏の命だよ！」今はエコで、節電のことをいろいろ言いますが、ああいう考えじゃないんです。神様の命だよ、というんです。だから大切にしないきゃいけない、それをやらないで坐禅なんてやっていたって意味がないぞ、と言われた。これほど素晴らしいことはないでしょう。それに似たことをものすごくたくさん教えられました。間違ったことをしたら、ものすごく怒鳴られた。もう生涯忘れられない。

その他、私達の祖先の中にも立派な人がいます。私は今度生れ故郷の旭川に行くのですが、私の父とか母のことを思い出しながら、それから祖父のことを思い出しながら行こうと思っています。

祖父は、まだ旭川が町としてできていない、区画ができたばかりの時、一等地を買ったんです。そこで仕事を始めたんです。そして、人々のために田舎からたくさんの人を呼んで、みんな働かせて、裕福にさせて、それから農場を開いて。そういうことをした人です。本当に素晴らしい方だと思います。二十代で村長になった。ちゃんと記録があるんです。そして、人々のために生涯を捧げた人だと思っています。

そういう人々が、やはり善意の人々であって、キリストの十字架の意味の功德によって救われる、とパウロは考えている。

すべての人を信仰へ導く神の^{はたら}き。

そして次の、一番大切なことは、すべての人を信仰に導くということ
は神の^{はたら}きだ、ということなんです。それはパウロの『コリントの信徒
への手紙』の、十五章22節に書いてあるんです。「アダムにおいてすべ
ての人が死にいくように、キリストにおいて全ての人が生かされるよう
になる」。

もちろん、^{かんのうどうこう}感応道交がありますので、神様の^{はたら}きはすべての人を生か
そうとしてらっしゃる。それに応えるかどうか、それはわたしたち人間
の責任です。しかし、できるだけ、^{つみびと}罪人でも、特にイエスさまは罪人を
救うためにこの世にこられた。とちゃんとそうおっしゃっていますね。
そういう意味で、すべての人を救おうとされている。それはキリストを
理解する上で、非常に大切なことだと思います。

福音

皆さんは福音という言葉を読みますと、何を考えますか。

福音を述べ伝える、ということがよく言われますね。例えば今日話を
している私は、パウロに基づいて福音を述べ伝えているのです。ただ私
の説教だけではないんです。そこで神が^{はたら}き活いているんです。これが大切
な、中心的な^{はたら}き活きです。述べ伝える福音の真っ只中で、神・キリスト・
聖霊が、すべての人を救おうとして活いている現実なんです。ここが、
本当の聖書のメッセージです。^{はたら}き活く神。

私は人間的なことを話しているわけではありません。私は確信を持って
いるのです。私の福音の^{はたら}き宣教は、同時にここで、御父とキリストと聖霊
が、皆さんのうちに^{はたら}き活かしているんです。そしてその福音を理解させ、
実行させようとしていらっしゃる。それがパウロの福音です。だから本
当の喜びなんです。喜びの幸せなんです。

ですから、福音には三つの側面があるわけですね。一つは宣教師・説教
師が福音を^{はたら}き宣教すること。二つ目は、その時同時にその中で、神・
キリスト・聖霊が救いの^{はたら}き活きをしておられるということ。三つ目は^{はたら}き
聞いている人、一人一人のうちで神・キリスト・聖霊の救いの^{はたら}き活きがあり、

そして同時に、聞く人びとがそれに応えるということ。その活はたらきに応答する、皆さん一人一人の働き。これら三つの一連のこと、三つのことが福音なんです。この全体を福音というんです。説教だけを福音とはいいません。これがパウロです。パウロはものすごくはっきりと、そういうことを、本当のキリスト教を教えてくださいののです。

それで皆さんに質問です。教えてください。我々が教会に行くと十字架があります。例えばイグナチオ教会ですと、復活のキリストがあります。我々は何処にいますか。シスター、何処ですか。

(返答)「その十字架の中にいます」

中にいます、いいですね。

それは活はたらきなんです。その活はたらきは、全世界に及んでいるんです。そこから逃れている人は誰もいません。未信者でも、どんな人でも。書いてあるじゃないですか。すべての人を信仰へ導く神はたらの活はたらき。キリストにおいて全ての人が生かされるようになるんです。だから十字架はたらの活はたらきなんです。復活はたらの活はたらきなんです。しかもそれは全世界に及んでいるんです。世界のどんな隅、どんな小さな場所にでも、その十字架はたらの復活はたらの活はたらきは及んでいるんです。それが及ばないところはどこにもないんです。逃れることができないんです。

神様のことを考えるときに、普通の、今までのキリスト教ではね、神様は前にいるんです。私たちはここにいて、神様は前にいる。それは本当のキリスト教ではありません。

そうではなくて私たちは神様に包まれているんです。いや、包まれているんじゃない、その活はたらきはたらのど真ん中はたらにいるんです。私達もその活はたらきはたらに動かされているんです。動かされて、それに応えていくと、ああ、そうだ、って分かってくるんですよ。応えない限り、反応はありません。残念ながらさらなるシグナルはありません。無駄になっているんですよ。応えないと、この十字架と復活はたらの活はたらきは無駄になっているんです。

ヨーロッパのキリスト教に活力が感じられないのは、全部そこです。神様はたらは活はたらかせようとしているのに、それを頭で考えているんです。はたらくんですから、神様はたらが活はたらくんですから私達も働はたらくんです。神様の勧めにしたがって、予言にしたがって、助けにしたがって、そしてそれを完成されようとしていらっしやる神様と共に働はたらくんです。これは素晴ら

しいでしょう。これが本当のキリスト教の福音ですよ。喜びの知らせですよ。我々を生き生きとさせるものです。

洗礼の祭儀＝「同行二人（キリストが共に歩む）」の奥義

洗礼を受けるという儀式、祭儀があります。それはどういうことを意味するかといいますと、それは同行二人だ、と思います。キリストが私たち一人一人と共に歩んで下さるという奥義である、そう私は考えています。それは見えません。私達がこの真ん中に立っていると、同時にキリストが、見えない形で歩んでくださっている。

そして初代教会の人たちにとっては、洗礼というのは、キリストの死へと洗礼を受けたんです。キリストが人類救済のために十字架で殺されたように、信徒も、救済のために日々十字架を担って生きて行く、ということ。キリストと信徒が共に十字架を担っていくこと、それが洗礼の祭儀です。

これは、^{かんのうどうこう}感応道交の考えを入れると非常に分かりやすいですね。まずイエス・キリストが十字架にかかって殺されて、そして救済された。だからそれに応えて、それに感応して、信徒も救済のために日々十字架を担って生きて行く。そうすると、キリストと信徒が共に十字架を担う感応道交が行われるわけです。

「アバ・父よ」を繰り返していると、だんだん自覚できる。初めは分からないんです、見えないんです。この活き^{はたら}は見えていない。しかし実行していくと、ものすごいキリストの活き^{はたら}が、この世界に及んでいることが見えて来るわけです。そして、具体的な日常生活のどんな隅にも、キリストと一緒に活^{はたら}いてくださっている。これは驚くべきことです。

そこに開眼すること、目覚めること。無意識から自覚へと問うことです。何べんも何べんも繰り返して行くことによって、だんだんそれが現われてくる。これは道元が非常にはっきりと教えてくれた。

だから、洗礼記念日など、日々^にそれを、洗礼のことを思い出す。特に私などは、もう大学の卒業間近になって洗礼を受けましたので、その記念ということをよく分かっています。幸いに私は、上智大学のクルトルハイムの聖堂で洗礼を受けたんですね。そこで毎日ミサを立てたり、

生活をしているわけです。本当に、それを思い出すためにいいですね。

この、キリストの洗礼の恵み、キリストが共に歩んでくださっているということ、日々実行すればするほど、体験できていく。自覚できるようになる。

キリストが父なる神の神的な力によって復活されたように、私たちも、同じ神的な力によって、復活の力を受けて、まったく新しい生命のうちに、喜び勇んで歩むようになる。パウロの言葉でいうと、「生命の新しいに歩む」。これが復活、キリストの復活の活きです。キリストは先に行ってくれる、私達はそれを受けて、それと一緒に歩いていく、その力。新しい命。そしてその命をうけて、キリストと信徒の感応道交かんのうどうこうが生まれてくるわけです。しかもそれが他者に影響を及ぼすわけです。

これはまた面白いですね。私の経験を申し上げますと、私が実際洗礼を受けたのは、私の兄の影響です。兄が最初に洗礼を受けて、戦争中に、戦争の真っ只中でキリスト信者になったんです。

兄は、神戸商大いまの神戸大学で五百旗頭先生という方に会って弟子になって、敬虔なカトリック信者のその先生の影響で洗礼を受けた。そして司祭になろうと思った。同時に、大学でその先生の後を継いで先生になることを、先生も望んでいた。イタリアに留学することがもう決まっていたんです。それを、イタリア語をもう少し勉強するためにちょっと延ばした、その間に戦争が始まってしまった。イタリアに行けなかった。その代わり戦争に駆り出されていった。

軍隊に行っても、2000人の幹部候補生の人たちが中国で教育を受けた。その中で、二人だけ銀時計をもらった。その一人が私の兄です。ものすごい頑張り屋です。ものすごく円満な人でした。どこへ行っても褒められた。

それが戦争にあって、ビルマの戦争で、死ぬんです。私は大学に入ったときにその知らせを受けた。本当に真っ暗ですよ。戦争が終って、軍国主義的な思想、天皇は神様であり、日本は神国で絶対に負けない、という、それがまったく嘘だということがわかった。その暗闇の中で生活して、だんだんキリストに導かれて、洗礼を受けて、そして司祭になろうと決心した。これはみんな兄の影響です。

ですから、兄は無駄死にしたんじゃないかなと思います。何の功德も

なくて、この世界に大きな影響を残さなかった。しかし、キリストの復活、十字架は見えないかたちで活はたらいているように、兄の十字架、苦しみ、それを乗り越えていった力は、見えないかたちで今でも活はたらいていると思います。そういうふうにして、我々信徒も、救いの業わざに参加することができるんです。

そこでですね、パウロは一つの面白い言葉を言うんです。「キリストの死への洗礼を受けた」。もっと正しくいえば、十字架の死、ということのパウロは非常に強調するんです。洗礼というのは、水に埋められるという、水の中に、その十字架とともに沈められる、そういう意味をもった言葉です。だからキリスト信者はそういう運命を持っているんです。キリストが十字架にかかったように、私たちも十字架の死にあずかっている。積極的に。そしてそれは見えないかたちで全世界に影響を及ぼしている。それがパウロの非常に重要な教えです。

日々の食事

時間が来てしまったんですが、一言だけ申し上げます。毎日の食事。ものすごく重要なことなんです。その証明を簡単にできるんです。主の祈りです。天にいらっしゃる御父おんちちよ、っていう。「御名みながあがめられますように、御国みくにが来ますように、御心みこころが天で行われるように地にも行われますように」。その次です、「日毎ひごとの糧かてを私達におあたえください」。

だから、日毎の食事は神の出来事なんです。神の国の出来事なんです。家じゅうを温めてくれるストーブのように、日々の生活の中心にあるんです。神様から恵まれて、食事を与えられているんです。だからいただく、本当に感謝していただくんです。そして生き返るんです。

これはね、ストーブなんです。日々の祈りの中で最も大切な、そして、祈るべきとき、神に感謝すべきとき、本当に深い深い喜びのときなんですから。神様からいただくんですよ、御父おんちちからいただくんですよ。

そういうふうなことを、皆さんが少し具体的な場で考えて実行していけば、キリスト教はもっとも身近な、素晴らしいものになると思う。ぜひ皆さん実行していただきたいと思います。今日はこれで終わります。

(付記：本稿は2012年7月7日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演を文章化したものです。)